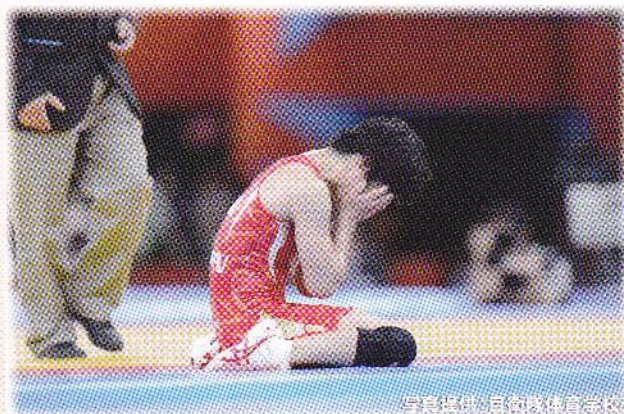
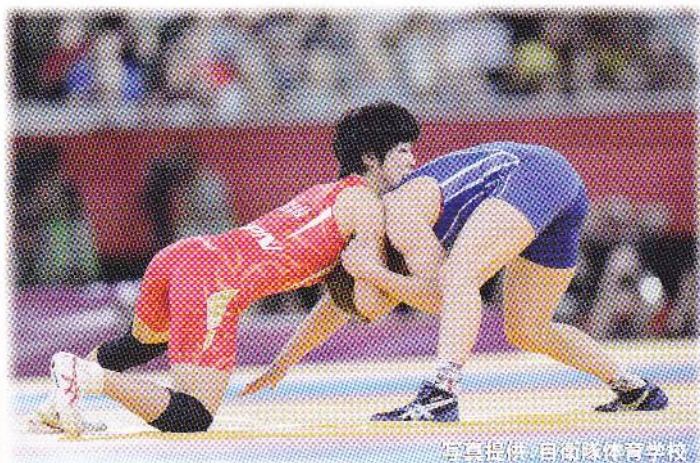


富士見市 道徳教材資料

～夢はかなう～

2012年ロンドンオリンピック
レスリング女子48kg級 金メダリスト

富士見市在住 **小原 日登美さん**



富士見市教育委員会

夢はかなう

く小原日登美選手 金メダルへの道のりく

「どんな時あきらめずがんばれば夢がかなうんだと思いました。」

これは、二〇一二年、ロンドンオリンピックレスリング女子四十八kg級で金メダルを獲得した、おぼらひとみ小原日登美さんの言葉です。かくとく

小原さんはこれまでに世界選手権で八度の優勝をするなど、輝かしい実績がありながら、オリンピック出場は今回が初めてでした。しかも、「最初で最後」と決めて臨んだオリンピックでの金メダル。周りからは順調に見えるレスリング人生ですが、ここまでの道のりはつらく厳しいものでした。かがや

日登美がレスリングを習い始めたのは、小学校三年生のときでした。習い始めた頃はレスリングが楽しいとは思いませんでした。レスリングの練習よりも、そこにいる友達と遊んでいることが楽しくて通っていたのです。ですから、「勝ちたい」「ほめられたい」ということは考えたこともありませんでした。

そんな日登美を変えたのは、小学校四年生のときにテレビで見た、女子レスリング世界選手権での山本美憂選手の活躍です。初めて見る山本美憂選手は、世界中の強豪を相手に勝ち進み優勝しました。山本選手の活やくに日本中が感動し、日登美もまた、強さと美しさをおねそなえた山本選手にあこがれを抱くようになりました。かっやく

「山本選手のような強い選手になりたい！」

そんな思いから、日登美はこれまで以上に熱心に練習にはげむようになりました。練習を重ねるうちに、日登美の心の中に「勝ちたい」という気持ちがだんだんと膨らんでいきました。ふくら

やがてその思いは、世界中のアスリートにとって最高の舞台である「オリンピック」へのあこがれに変わっていきました。そして、日登美は中学校の卒業アルバムに、「オリンピック優勝」と力強く書きました。



日登美は「オリンピック優勝」という目標に向かって、毎日厳しい練習を重ねました。中学・

高校では大会に出ても思うように勝つことができず、大学に入るとこれまでの努力が実を結び、多くの世界大会で勝ち進むことができました。

二〇〇四年、アテネオリンピックで、女子レスリングが採用されましたが、日登美の階級である五十一kg級はないため、どんなに勝ち続けても、あこがれのオリンピックには出場することはできませんでした。出場するためには、妹、真喜子が活躍している四十八kg級に挑戦することもできましたが、母の「姉妹で戦って欲しくない」という思いもあり、オリンピック種目の階級にある五十五kg級で出場しようと決意しました。

ところが、オリンピック選考会の決勝戦で吉田沙保里選手に敗れ、念願のオリンピック出場であと一步のところで逃してしまい、あまりのショックから引退を決意しました。

その後、しばらくの間、レスリング競技から離れていましたが、レスリングの楽しさが忘れられず、現役に復帰することを決意しました。世界の大舞台で何度も戦ってきた日登美でしたが、現役に復帰することは、0からのスタートです。体をつくらなければなりません。まずは、現役を引退して増えた七十kg近い体重を、五十五kg級の体重まで減量しなければなりません。それに加えて、落ちた筋肉を取り戻すために、現役のときの何倍も厳しいトレーニングが必要でした。

毎日何時間も行う厳しいトレーニング、自分の体重よりも重いものを持ち上げるウエイトトレーニングに明け暮れる日々でした。どんなに練習をしても自分がイメージするような動きがなかなかできなくて、自分を責めることが何度もありました。



「今の私に、オリンピックに出場することができるのだろうか。」
不安や挫折と向き合いながら、それでもあこがれのオリンピックへの思いを持ち続け、日登美は想像を絶する厳しい練習を重ね、二〇〇八年、北京オリンピックに五十五kg級で挑戦しました。しかし、再び、吉田選手にやぶれてしまいました。

子どもの頃からの夢「オリンピック」のチャンスを逃した日登美は、二〇〇八年の世界選手権では、本来の五十一kg級に出場し、六度目の優勝を果たしました。チャンピオンとして表彰台の真ん中に立った日登美でしたが、「これがオリンピックだったら…」という思いは最後まで消えませんでした。この大会を最後に再び現役を引退し、自分が果たせなかった「オリンピック出場」を四十八kg級の妹、真喜子にたくしました。

日登美は真喜子が試合に出場するときには、必ず一緒に会場に行きました。しかし、会場で真喜子のサポートをしながら、日登美の心は、コーチとして妹を勝たせてあげられない切なさや悔しさでいっぱいでした。また、妹に対する思いとは別に、日登美は、そこで戦う選手たちの強さと美しさに心をうばわれていました。日登美は、戦っている選手を間近で見るたびに、「もう一度戦いたい！」という気持ちと「私はこのままでよいのだろうか」という思いがだんだん強くなっていきました。

山本選手にあこがれ、「強い選手になりたい」と思った少女時代。そして、あきらめきれないオリンピックへの思い。妹の真喜子の現役引退をきっかけに、日登美は二〇〇九年末、両親や夫など周りの人の支えもあって、オリンピック種目の階級である真喜子が戦っていた四十八kg級で再びオリンピックをを目指すことを決意しました。初めての四十八kg級での挑戦は、想像以上につらいものでした。さらに厳しくなった減量やトレーニングから逃げ出したくなるときもありました。でも、そんなときは家族、妹、コーチがいつも支えてくれました。「オリンピックはみんなの夢」その思いを力に変え、がんばることができました。

そして二〇一二年に行われた世界選手権で優勝を果たし、念願のオリンピック出場権を手に入れました。

ロンドンオリンピックに出場した日登美は、初戦から順調に勝ち進みました。準決勝では、北京オリンピックの金メダリスト相手に勝利をおさめました。

そしてむかえた決勝戦。相手の厳しい攻めにも決してあきらめることなく、積極的に攻め込んだ日登美は見事に勝利をおさめました。その瞬間、日登美はマットの上で大粒の涙を流しました。

「最初で最後」と決めて臨んだオリンピック。その大舞台で手にした金メダル。日登美の笑顔に、世界中の人々がおしめない拍手を送りました。

■作成委員

梅野俊明 (元諏訪小学校 校長)
貴志祐子 (和光市立第四小学校 校長)
後藤輝明 (勝瀬小学校 教諭)
小峰夏子 [挿絵] (関沢小学校 教諭)

■作成協力

自衛隊体育学校

■事務局

石井勝博 (富士見市教育委員会 学校教育課 指導主事)

■発行

富士見市教育委員会 平成二十五年十一月

